2020.9.25
No.220

編集・発行人　樋口みな子

E-mail
minginga@agate.plala.or.jp
URL http://www13.plala.or.jp/minginga/
郵便振替「銀河通信」
02740－7－56535
（郵送年間1,500円）

一人ひとりが大事にされる社会に

8月21日午前4時40分　江別の朝焼け

新型コロナウィルスの感染がなかなか収まりません。そんな中で、7年8カ月もの長期政権の安倍晋三総理が辞任しました。2015年にSEALDsが中心になって安保法案に反対して国会前を包囲した日々を思い出しました。私も札幌大通での集会に何度も足を運んで声をあげました。当時の学生の熱気が素晴らしく、私は安保法案は廃案になるかも知れないと期待しました。でも安保法はその年の9月に成立。集団的自衛権に道を開きました。共謀罪も成立。沖縄では県民一丸となって、辺野古新基地に反対しているのに、警察を動員してまで建設を強行。モリカケ問題では、公文書の改ざん、隠ぺい、廃棄で役人の自殺者まで出ました。「桜を見る会」の私物化も目に余りました。黒川弘務東京高検検事長の定年延長も、法にのっとらずに勝手に決めました。民主主義をことごとく無視しました。

菅義偉官房長官が、安倍政治を継承すると首相になりました。所信表明で「国の基本は、自助・共助・公助」と表明。自助に力点を置いていると思います。国民は自分で努力して、出来ないのは自己責任とは冷たすぎます。医療や福祉などに力を入れていただきたい。夫は重いリウマチで、高額医療費限度額申請をしていますが一回ごとにかかる医療費が57000円です。今はほとんどが院外薬局ですから、診療費が1万円だったとしても、院外薬局で最大の57000円の支払いということもあります。夫の月額年金の4分の1です。新自由主義は、大きな格差を生んだと思います。私たち一人ひとりが大事にされる社会になるよう、野党は共闘して政権交代できたらと思います。

テニスの大坂なおみさんは北海道と縁の深い選手です。お母さんが根室出身です。なおみさんは人種差別に反対を鮮明にしてきました。「私はアスリートである前に、一人の黒人女性です。私のテニスを見てもらうよりも、いまは注目しなければいけない大切な問題があります」と発言しました。直後に迎えた全米オープンでは、7枚のマスクを試合ごとに付けました。マスクには、警官などに撃たれて亡くなった人の名前が記されていました。言葉通り、7試合を戦い抜き優勝しました。インタビュアーにマスクにこめたメッセージを問われたなおみさんは「あなたがどんなメッセージを受け取ったのか。それのほうが大事です」と答えました。一人の人間として、黒人の人権を訴えたなおみさんの発言と、差別に対して打ち込んだ力強いサーブに、心を揺さぶられました。

北海道寿都町で、核のゴミ最終処分場の「文献調査」に片岡町長が応募して、怒りと不安で一杯です。寿都町では市民団体「子どもたちに核のゴミのない寿都を！町民の会」が立ち上がりました。科学者の小野有五さんが、何度も寿都に通って市民運動を応援しています。神恵内村でも同じ請願が商工会から村議会に出されました。「脱原発・自然エネルギーをすすめる苫小牧の会ニュース」を発行している津田孝さんは、「応募の理由として、新型コロナウイルス感染拡大で産業が打撃を受けていることによる町財政の将来への不安を挙げています。しかし、町長は民主主義に必要な手続きを取っていません。住民アンケートを採ったわけでもなく、議会の承認を得たわけでもないのです」と批判しています。署名活動が全道に広がっています。子どもたちに安心して暮らせる未来を残したいですね。

少しずつ活動を再開しています

泊原発裁判の口頭弁論が開かれました

コロナ禍で、集会や講演会にはしばらく参加していませんでしたが、9月1日、泊原発の廃炉をめざす会の口頭弁論があり藻岩山登山を終えて参加しました。

裁判所で、一般傍聴券を求めて34人が並びましたが、13人に限られました。私はハズレ。

高教組会館で報告会が行われるまで、廃炉訴訟弁護団長、市川守弘さんのテレビ番組「山小屋弁護士」を観ました。自然保護とアイヌの人権を守る弁護活動を無償で行っています。遠く沖縄にも弁論活動で通っています。今は札幌から十勝に拠点を移し山小屋で冬は薪で暖をとる暮らしを利美さんとされています。清貧な弁護士を貫く姿に心の中で拍手を送りました。

私もかつては泊廃炉の会で事務局を担い、2017年までニュースを担当しましたが、夫の病気を機に降りました。懐かしい事務局のみなさんにお目にかかれて言葉を交わせたのが嬉しかったです。

札幌映画サークルの上映会が好評です

コロナ禍で初の上映会「ゆずり葉の頃」は7月25～26日に札幌教育文化会館で開かれました。「銀河通信」219号の編集中で一日だけ準備のお手伝いをしました。八千草薫さんの追悼上映会でもあったので多くの人が足を運んでくださり7回の上映で347人が入場しました。

万全の感染対策で安心して鑑賞できたことと、映画を心待ちしていたことが伝わってきました。25人が札幌映画サークルの会員になってくださいました。

2回目の上映会「忘れじの面影」は9月13日(日)に札幌エルプラザホールで3回上映。1948年の作品です。雨にも関わらず160人が鑑賞しました。

上映機材はシネマ一馬力代表の岡村雄二さんが数十万円を投資して購入した音響コントローラとプロジェクターです。

このセットは9月13日初使用になりました。(写真右上)
右下写真は受付風景(撮影・いずれも山口理喜三さん)

表大雪の展望台ニセイカウシュッペ山（１８８３m）に登る

８月２１日　大槍のトラバースから表大雪を振りかえる

8月21日、「表大雪の展望台」と言われる北大雪のニセイカウシュッペ山に登りました。アイヌ語で「断崖絶壁の上にある山」標高1883mです。

出発前、何気に外に出たら、見たことがないような素晴らしい朝焼け(1面の写真)で、慌ててスマホで撮りました。わずか5分ぐらいでこの光景は消えてしまいました。

友人の車に同乗させてもらい江別を5時に出発。林道入り口から茅刈別(ちかるべつ)川沿いに走り、長い古川林道はかなりの悪路です。

登山口8:20出発。標高1100mです。笹で覆われて、長くて単調な尾根道が続きました。でも涼しく助かりました。表大雪の景色を楽しみながらの歩きですが雲が出て、見晴らしはよくない。

それでも1500mを超えると表大雪の大展望にしばし見入りました。チシマノキンバイソウがわずかに残っていました。チングルマは羽毛状になっていましたが、秋を感じさせて風情がありました。

この山にに4～5回登っていますが、2年前の大雨で登山道がえぐられ、笹の根だけで支えている場所が何カ所もあり、足を踏み外したら、崖に落ちて大怪我するのではないかと怖かったです。とても緊張しました。

休憩も含めて往復5時間40分。登山口に14:00でした。登山者は5組。静かな山を満喫しました。

大槍をバックに高山植物パトロール中のみな子とチングルマ

帰りの林道では、シカの親子がのんびり道に出て遊んでいました。動物も大きな道が好きなようです。(右写真)

初めての大雪高原沼めぐり ヒグマに注意！帰路のコースが変わっています

ヒグマ情報センター

9月9日、大雪高原沼めぐりをしました。山の友人に同乗させていただき大雪高原温泉に着いたのは少し道迷いして8時半。

ここから緑岳には登ったことがありますが、高原沼めぐりは初めてです。環境省のヒグマ情報センターでコースのレクチャーと、クマよけの鈴をつけるよう指示されました。私は鈴はなく笛を首に掛けました。スタッフから、地図で、どこでクマがいたかを地図に落としたもので説明あり、7～8月は多数の目撃情報があったことが分かります。9月に入ってクマの目撃は激減していて少し安心しました。それでもクマは怖い。時計周りで一周コースですが、ヒグマ出没のため三笠新道は閉鎖されています。

登山口8:55出発。歩道はよく手入れされていて両側からのヤブの被りもほとんど無く、ダニの心配もなかったです。

案内地図

アカエゾマツが美しい緑沼

無粋な名前の土俵沼を通り、アカエゾマツの緑が湖面に映って美しい緑沼には10時半でした。高根ヶ原中腹の雪渓が大きく残り、緑岳や白雲岳も見えてビューポイントです。のんびり軽食を食べていると、情報センターのスタッフがものすごく重そうな資材を担いで登ってきました。息も上がってなくて体力に脱帽！

湖面の空が美しいエゾ沼

高根ヶ原を眺めながら沢沿いの道を進むと鴨沼。水草が生い茂りカモが羽を休める沼のようです。緑沼にもたくさんいました。えぞ沼は湖面に映る青空が美しい。階段の上から見る姿が北海道（えぞ）に見えるところから「えぞ沼」と呼ばれるそうです。式部沼と続き、大学沼でまた大休止。大学沼のほとりはチングルマなどの高山植物の草原帯のためヒグマが夏、食餌に集まってくる所でヒグマ情報センターではパトロールを常時行っています。私たちが登った時も会いました。

高山植物帯の大学沼

大学沼周辺では、エゾオヤマリンドウとヨツバヒヨドリの群落が見事でした。マルハナバチがエゾオヤマリンドウの花弁に入り込み蜜を吸っている光景や大きなトンボが優雅に湖面スレスレに飛ぶ姿に、昆虫にとっても大自然はのびのび過ごせるようですね。

エゾオヤマリンドウ

ヨツバヒヨドリ

エゾオヤマリンドウの蜜を吸うマルハナバチ

ルリボシヤンマが緑沼水面すれすれを飛んでいました

ここから高原沼までは結構な急登でした。一周コースの中間地点になります。高原沼近くに上ると、さっきの大学沼とその先に音更山・石狩岳の山容が見えてきました。やがて低木と草原が広がり、牧歌的でした。テレビで紹介されるモンゴルの風景と似ていて、楽しい。

高原沼を過ぎると帰路になりますが、空沼（からぬま）までの頻繁な方向転換とアップダウンの繰り返しがきつかったです。空沼を見下ろせるポイントに立つ標柱にたどり着きました。空沼まで下りてみて「あれは閉鎖中の三笠新道の分岐だったのではないか」と友人はいいます。ヤンベタップ沢沿いの歩道高差100Mは厳しいアップダウンありで、一番大変でした。そうして沢沿いからの尾根筋への登り返しに疲れがどっと出ました。

草原と緑岳

ヤンベ温泉分岐の「のぞき地獄

ヤンベ温泉分岐の「のぞき地獄」が壮観！温度は90度あるそうです。エゾオヤマリンドウの群落とナナカマドの赤い実が秋を感じさせてくれましたが、山も暑かったです。ヒグマ情報センター到着13:40。無事下山しました。

本 Books

「書評はテーマによって相応しい人に書いてもらったらどうか」と読者からご意見をいただきました。早速、植村裁判で意見陳述された喜多義憲さんにご寄稿いただきました。

克明な記録をもとに徹底検証した慰安婦問題をわかりやすく解説

朝日新聞の慰安婦報道と裁判

朝日新聞編集委員　北野隆一著
朝日新聞出版　2,090円

2015年年初、右派3グループが朝日新聞社に対し相次ぎ集団訴訟を起こした。「私たちの究極の目的は、日本国民に対して仇なすあの新聞社を絶え間なく攻撃し続けて廃刊に追い込むまであらゆる方法を取りたい。波状的に継続的に、倦まずたゆまずあの新聞社を攻撃し続けましょう」。これはその一つ、「朝日新聞を糺す国民会議」による25、700人集団訴訟の代理人の発言だ。控訴審第1回口頭弁論後の報告会でのことだった。一連の訴訟には「すべて朝日の慰安婦報道によって国内外に住む日本人の名誉が傷つけられた」が通底するが、いずれも原告側の敗訴で終結した。それでも、反朝日行動は延々と続く。

きっかけは、2014年8月の慰安婦問題を検証する朝日新聞の特集記事。戦中の朝鮮・済州島で女性を慰安婦にするため自ら強制連行したとする吉田清治氏（故人）の証言を「虚偽」として取り消した時点で批判が高まった。本書は一連の朝日報道とこれに対する保守・右派の批判を訴訟の経過に沿いながら克明に記した。さらに社外有識者による「第三者委員会報告書」や米国での慰安婦像撤去訴訟、櫻井よし子氏、西岡力氏らに対する植村隆・元朝日新聞記者の損害賠償請求（名誉毀損）訴訟についても詳報している。

植村氏は1991年8月、朝日新聞大阪社会部記者当時、ソウルの慰安婦支援団体で元従軍慰安婦だった金学順さん（故人）のインタビュー録音に接しスクープ報道。1930年代から終戦まで、旧日本軍将兵に性をじゅうりんされた慰安婦問題の「生き証人」たちのカミングアウトをあと押しする功績を残した。ところが第二次安倍政権時代に入り「歴史修正主義」のバックラッシュがいっそう強まり、櫻井氏らが、90年代初頭の植村報道を「捏造」と決めつけたことを契機に家族への脅迫を伴うすさまじいバッシングが続いた。

実は評者は91年の植村氏の最初の報道から数日後、北海道新聞ソウル駐在記者として金学順さんと面談し、実名、肖像写真入りで初めて報道した。当時は植村氏の記事内容を全く読んでいなかったが、両社間の記事内容に大きな違いはない。同じ時期に同じ人物の語った言葉を記事化した結果である。しかるに片方は、右派にとり最大の「標的」であるが故に「捏造記者」の汚名を着せ、他方、微力な地方紙はスルーという醜悪な扱いとなった。

植村氏を原告とする東京、札幌での二つの裁判で被告側の事実誤認や原告への直接取材を怠った2人の被告を裁判所は免責した。「（被告らは）本人に取材しない、取材しようとする努力をしない。そして杜撰な資料だけでそう（評者注・捏造と）断定して、それを裁判所が推論の基礎となる十分な資料があると評価できる、と言ったら、なんでも言えてしまいます。これは非常に恐ろしい判決です。（中略）司法がフェイクニュース、しかも捏造というフェイクニュースを野放しにすることができる」。札幌高裁での控訴棄却後の記者会見で植村氏が上告表明しながら発したこの悲痛な叫びが最高裁法廷ではどう届くのだろうか。

著者は2014年の検証特集記事の担当記者のひとり。「慰安婦報道問題イコール朝日新聞問題」とする右派論陣に対し「当事者」の一員として向き合い、公判後の集会には主催者に拒まれない限り臨場した。現在も慰安婦問題の取材を続ける。本書は一連の裁判プロセスにとどまらず、慰安婦問題総体の基礎知識から問題の捉え方までをわかり易く解説する書となっている。

（喜多義憲・札幌国際大学非常勤講師）

中国に２度派遣

戦争はいけません
元従軍看護婦　戸田ノブ
９９歳の思い

山野井孝有　後藤眞理子共著
自費出版

戸田ノブさんは1919年に福島県石城郡草野村で出生。看護婦として、1度目は中国山西省に1941年4月から約2年半、2度目は山東省に44年7月から派遣された。現地では、けがをするなどした兵士らの看護をしました。

証言をまとめたのは南足柄市にあった母子健康センターで戸田さんの同僚だった助産師の後藤眞理子さんと、後藤さんの知人の山野井孝有さんです。戸田さんは復員記録や当時の写真を保管していました。二人は、戸田さんが暮らす施設に通って聞き取りました。

山西省の病院にいた時のことです。血だらけの兵士10人ほどが担ぎ込まれてきた。「水をくれ、水をくれ」とうめく兵士たち。戸田さんによると、軍医の指示で水を飲ませたところ、ある兵士の胸の傷から飲んだばかりの水があふれ出たという。壮絶な体験が聞き取られています。

ノブさんは傷病兵を看護して回復させる仕事は「傷病を治してあげて兵隊を再び戦場に送ること」で従軍看護婦たちにとっては、「とてもやり切れない思いがあった」「戦争はえらい人たちが始める。戦争で犠牲になるのはいつも貧乏人だ。一般の人はみんな仲良しだった」とも語り、印象に残りました。細かな戦場での体験は40年来親交があった後藤さんが主に聞き取り、山野井さんは、日赤看護婦とそれ以外の従軍看護婦では、待遇が違ったことを詳細に調べています。日赤職員だった従軍看護婦

は年金がもらえましたが、そうでない従軍看護婦は、戦後補償から除外されました。そんな事実もこの本で初めて知りました。ノブさんは、証明してくれる人がいたため年金をもらえたようです。戦後、元航空兵だった人と結婚しますが、幸せではありませんでした。幼い娘を引き取り、保健婦の資格も取り、懸命に働き育てましたが娘さんを若くしてがんで亡くしています。娘さんが生きていたら1948年生まれの後藤さんと同じ年でした。

私の父も福島県矢祭町から通信兵として南方に行きましたが、病気になり帰ってきました。歴史学者の藤原彰氏によると、日中戦争から終戦までに亡くなった軍人は約230万人。うち6割の約140万人が戦闘ではなく、病気で亡くなったと推計しています。そのほとんどが「餓死」だったとか。そのことを知って、戦争のむごたらしさに胸がつぶれました。父が帰って来れたのは奇跡のように思えました。ノブさんは、「戦争はいけません」と何度も語ったそうです。

7人きょうだいの末っ子で、両親を早くに亡くした父は戦後、身寄りが誰一人いない北海道に渡り、道庁で試験を受けて公務員になりましたが、戦争体験を語ることはありませんでした。しかし、平和への思いは秘めて労働運動に力を尽くしました。山野井さんと父の人生が重なり、懐かしい気持ちがしました。

著書の申し込み、問い合わせは山野井孝有さんTEL 043-231-6110にお願いします。

内戦・空爆・旱魃に見舞われた異国の大地に起きた奇跡

天、共に在り―
アフガニスタン三十年の闘い

中村哲著　ＮＨＫ出版1,760円
（2013年初版）

2019年12月4日、中村哲さんはアフガニスタンの州都ジャララバードで車の移動中に何者かに銃撃され、緊急手術も及ばず亡くなりました。まさかという思いと、いつかこんな日が来るのではという思いが交錯した日を思い出します。

なぜ、医師としてアフガニスタンに渡ったのか、その後なぜ用水路建設に取り組んだのかが、淡々と解き明かされます。

伯父の作家であり詩人の火野葦平や安保闘争など戦争と平和への想い、昆虫好きで山に親しみ、農学部に進むつもりが医学部に進みます。人との出会い、キリスト教との出会いがあってペシャワールでのハンセン病などへの医療支援につながったことが綴られます。アフガン難民事情から医療以前の水・農業対策と政治や自然との対応など、ペシャワール入りの1984年から2013年までのアフガニスタン、パキスタンでの活動が臨場感あふれる文章で書かれ一気に読み進みました。

特に印象的な文章があります。ペシャワールで、重いハンセン病の女性ハリマを生かす選択として、気管支切開に踏み切った時の苦悩を語ります。「自分もまた、患者たちと共にうろたえ、汚泥にまみれて生きてゆく、ただの卑しい人間の一人に過ぎなかった。ただひとつ確信できたのは、小器用な理屈や技術を身につけてドクター・サーブと尊敬されていても泣き叫ぶハリマと同じ平面にあるという事実だけであった」「美しく飾ら言葉より、天を仰いで叫ぶハリマの自暴自棄の方が真実だった」。中村さんの誠実さがよく表れていると思いました。

度重なる旱魃で、命の水がない。そのために多くの人が死んでいく現状を改善したいと、中村さんは先頭に立ち井戸掘り事業を開始。「ペシャワール会」の資金・人的援助のもと、2006年までに1600本の井戸を堀り、25キロに及ぶ用水路を拓き多くの人々を救ったのです。テレビドキュメンタリーで砂漠から緑に変わった様子が劇的でした。食べるために戦士になった人も、地元に戻って、生き生きと農業にいそしむ姿が目に浮かびます。ペシャワール会を通じて年間3億円が投じられたという。市民運動の力に圧倒されました。

敬虔なクリスチャンとして、人道主義を貫いた生涯に感銘を受けました。

盗まれた時間を取り戻す

モモ

ミヒャエル・エンデ著　大島かおり訳　岩波書店　1,870円

私が「モモ」を読んだのは27年も前です。小さな子どもが読むには難しく、そのまま本箱に収まったままでした。コロナ禍で、「モモ」がベストセラーになっていると、Eテレ「100分de名著」でも話題になりました。

主人公は、街の円形劇場の廃墟に住みついた小さな女の子モモ。彼女の不思議な魅力にひかれて大人も子どももモモの周りに次々と集うようになり、街の人々との間に温かな友情が生まれます。ところがある日、「時間貯蓄銀行」から来た灰色の男たちがこの街に現れます。人間の時間を盗んで生きる彼らの詐術によって、街の人々は時間の節約を始めました。どんどん冷えきっていく街の大人たちの心。友人たちを助けるためにモモは「時間の国」を訪れます。そこで出会った時間を司るマイスター・ホラと不思議な能力をもった亀・カシオペイアの助けを受けて、モモは灰色の男たちとの戦いを開始します。

たくさんのエピソードが面白い。モモの親友の掃除夫ベッポは「いちどに道路ぜんぶのことを考えてはいかん、わかるかな？　つぎの一歩のことだけ、つぎのひと呼吸のことだけ、いつもただつぎのことだけをな」「するとたのしくなってくる。これがだいじなんだな」。観光ガイドの若もののジジもモモに言います。「ちっとばかりいいくらしをするために、いのちもたましいも売りわたしちまったやつらを見てみろよ！おれはいやだな、そんなやり方は。たとえ一ぱいのコーヒー代にことかくことがあっても―ジジはやっぱりジジのままでいたいよ！」

人々は時間を奪われることによって、本当の意味での「生きること」を奪われ、心の中は貧しくなり、荒廃してゆきます。見せかけの能率の良さと繁栄とはうらはらに、都会の光景は砂漠化していくのです。まるで今の時代を表しているようでエンデの世界観に驚きました。この本を読んで、自分の中の「モモ」を思い出しました。心の豊かさを失ってはならないですね。

小さな声から大きな力へ

『パブリック 図書館の奇跡』

樋口 みな子

札幌映画サークル会報シネアスト１０月号掲載

図書館での一夜の出来事を通してアメリカが抱える人種差別や格差、貧困、アルコール依存症やドラッグ中毒、フェイクニュースなど、さまざまな問題が盛り込まれ、「公共」とは何かを問いかけます。

舞台は真冬のアメリカ・オハイオ州シンシナティ。連日氷点下を記録しており、図書館の閉館時間で追い立てられたジャクソン(マイケル・ケネス・ウィリアムズ)は館員に告げます。「俺たちは凍死してしまう。一晩ここに泊めてくれ」。彼は常連利用者のホームレスでした。

大寒波の影響で市のシェルターが満杯なため行き場がない彼らは70人。規則違反を承知で、「緊急時の避難所であるべきだ」と手助けすることにした館員スチュアート(エミリオ・エステヴェス)ですが、事態は思わぬ方向に進みます。市長選前のパブリシティに利用しようと企む検察官や、メディアの真実でない報道によって、スチュアートの暗い過去が暴かれ、人質事件の容疑者に仕立て上げられてしまうのです。そこからスチュアートが驚きの決断をするまでが描かれます。

今年の春から新型コロナウィルスのパンデミックにより、貧困や格差問題が深刻になり、ホームレスの人たちはどうしているのだろうと思いをはせました。北海道の冬は厳しい。地下街で大きなトランクを引きながら、休む場所を探していた彼らは、どこで眠ることができたのだろうかと胸が痛みました。

図書館は人と本、人と組織をつなげる役割があると思います。図書館は本を読むだけでなくさまざまな人々と出会う場であってほしいと思います。私と他者がまじりあって、辛い立場の人を理解したい。人と人が隔てあうのではなく、一緒に生きていくために、差別をしないで互いにいたわり、助けあえたらいいなと思います。

私の夫が入院していた時、役所に勤めている人と同室になり、「どんな仕事をされていたのですか」と聞いたら、「30年間、ホームレスを担当していました」と答えたので生活保護の受給に奮闘したのだと思っていたら、思いがけない言葉が返ってきたそうです。「いや、彼らは定住せずにたむろしているだけだから、場所をよけろと追い出すんだ」と。夫は声を失ったと語りました。「人としての優しさはないのか」と話を聞いた私も怒りがこみ上げました。

図書館占拠という設定は意表をつきますが、その一夜を通してさまざまな境遇の人々の人間模様が描かれることも、この作品の見どころです。予測不可能にして笑いと涙たっぷりのストーリーが展開し、いくつもの社会的な問題提起をはらみながらも、温かな人間味に満ちあふれていました。図書館員も、ホームレスの人たちも同じ目線で語られているのに共感。よく練られていて、今年観た映画の中でも出色です。

今の時代、路上生活者には誰でもなり得るのだと思いました。日本でも彼らは社会から疎外され、公園からも追い出されています。住民票がないために特別定額給付金も支給されていません。

スチュアートには図書館に助けられた体験がありました。「本に救われた」と語った場面では、私の子ども時代を思い出しました。父の転勤で1年ごとに転校し、クラスで友人ができないので、いつも図書館の本が友だちでした。中学2年で転校した時に読んだ「アンネの日記」は今も大切な本です。アンネが人種差別に怒り、誰もが自由に生きられ、平和を願い続けた思いを私は引き継ぎたいと、個人でミニコミ紙を発行しています。

平和的にデモを行っている彼らでしたが、リポーターは嘘を報道します。外にいる友人の機転で、内部の様子を動画で紹介。スチュアートは「怒りの葡萄」の一節を静かに読みあげるのです。「飢えた人々の目の中には、次第にわき上がる激怒の色がある。人々の魂の中に怒りの葡萄がずっしりと実っていく。収穫を待ちながら」。それは、みんなの想いでした。

ジャクソンは立てこもりについて「神が与えた声を使うか黙るかは私たち次第だ。黒人の先駆者たちがつないできた魂の炎を守る」と訴え、「声を上げろ／make some noise ！」と仲間70人が唱和します。自分たちの窮状を訴える力強い声にジーンとしました。南北戦争期、シンシナティが奴隷制廃止運動の中心地であったことを想像させました。

彼らの怒りの声に人々の共感が広がり、図書館の前には支援物資を届ける市民であふれました。包囲したたくさんの警察官に、非暴力で弱い立場の者たちの意志を貫いたラスト。人間の尊厳を鮮

やかに示し、大きな変化への胎動になるのだとユーモアを交えて伝えました。脚本、主演も兼ねたエステヴェス監督の「図書館は民主主義の砦だ」との想いがぎっしり詰まった秀作。

図書館は日本では、本の貸し借りと読書する場ですが、アメリカでは文化、教育の提供や、弱者への社会的な支援機関の役割も果たすなど、民主主義を体現する存在であること。そして市民との距離の近さに驚き、感動しました。

（c）EL CAMINO LLC. ALL RIGHTS RESERVED

歌と人生で世界を照らした

パヴァロッティ　太陽のテノール

ロン・ハワード監督

パヴァロッティはオペラのスーパースターともいえる存在で、世界中の人々を魅了してきました。生きることのすべてを全力で愛と人生で世界を照らした偉大な歌手の輝かしい日々を浮き彫りにしたドキュメンタリーです。

パヴァロッティが思いつきでアマゾンの奥地にある美しいアマゾナス劇場を訪れた場面から始まります。そこではごく少数を前にピアノ伴奏で、トスティの歌曲「小さな唇」を歌い、やわらかい響きで、いきなり聴く人の心を奪ってしまいます。一方、オーケストラをバックに大観衆の前で歌っている場面もあります。23人のインタビュー映像では、U2のボノがパヴァロッティのアーティストとしての信念を証言し、マネージャーやエージェントがショービジネスの裏側を明かし、前妻、最後の妻、3人の娘たち、そして愛人は欠点が同時に魅力だった素顔を告白。生きることのすべてを全力で愛した男の輝かしい日々が映し出されます。

忘れてはならないのは、内戦で貧困に苦しむ子どもたちへの惜しみない支援活動です。ダイアナ妃との交流を捉えた貴重映像も素敵でした。ホセ・カレーラスが白血病を克服したことから、それを祝うために、1990年にローマのカラカラ浴場で開催された「三大テノール」（ルチアーノ・パヴァロッティ、プラシド・ドミンゴ、ホセ・カレーラス）公演も素晴らしかったです。

この映画にはパヴァロッティという人間が正直に描かれています。親友のボノは「彼が偉大なのは犯した過ちや希望や欲望、人生のすべてを歌にぶつけているからだ」と語ります。私は歌が心に沁みて涙が止まりませんでした。「ラ・ボエーム」「トスカ」など、絶頂期の歌声や、よく知っている「トゥーランドット」の「誰も寝てはならぬ」も披露。至福の2時間でした。

難民少年がチェスで優勝

ファヒム　パリが見た奇跡

ピエール＝フランソワ・マンタン＝ラバル監督

バングラデシュのチェスの天才少年ファヒム（アサド・アーメッド）は8歳。2011年、身の危険を感じて父とパリに脱出します。母と別れ、難民センターで保護されますが、父子の政治亡命は許可されません。ファヒ

ムはフランスでもっとも優秀なチェスのコーチシルヴァン（ジェラール・ドバルデュー）に出会います。最初は警戒心を抱いていたファヒムとシルヴァンは、次第に心を通わせていき、指導のおかげでめきめき力をつけていきます。チェスの教室の子どもたちも、個性的ですぐに打ち解けます。クラブのオーナー、マチルド（イザベル・ナンティ）は何かと力になってくれるのです。でも父は言葉が分からず、場当たり的な仕事しかありません。しかも難民申請してもいい加減な通訳がきちんと対応しないため、認可されないのです。フランス語の覚えも早いファヒムが父について通訳していたらと思うと悔しいです。

全仏大会の12歳以下クラスで優勝をめざすファヒム。チェスは分からないけど、ファヒムが勝ち進むシーンが爽快！

一方、父は街頭で物売りをしていて不法滞在で拘束されます。マチルドは首相に電話します。「フランスは人権の国ですか？それとも人権宣言をしただけの国ですか？」。マチルドの率直さとそれにこたえる首相も素晴らしい。ジーンとしました。日本は難民を受け入れていません。こんな時どんな対応をするのでしょうか？

主人公の少年はバングラデシュから来仏3ヶ月。フランス語の習得の速さと、自然な演技が良かったです。チェスの奇跡と、行動で、国を動かす。実話をもとにした素晴らしい作品でした。

渡り鳥　無事に飛んで

グランド・ジャーニー

ニコラ・ヴァニエ監督

絶滅危惧種の渡り鳥を助けた実話です。人が渡り鳥と伴走しながら、安全な飛行ルートに導く。そんな常識破りな自然保護活動からインスパイアされた物語。

ゲーム好きなトマ（ルイ・バスケス）は14歳。パリで母と暮らすが、夏休み、鳥類学者の父クリスチャン（ジャンポール・ルーヴ）と、南仏の湿地帯カマルグで過ごすことに。父は絶滅危惧種のガンたちとの飛行計画を準備中。トマは父と孵化に偶然立ち会ったことでヒナたちの親になり、出発時の騒動で、トマ一人で超軽量飛行機で飛び立ってしまいます。ノルウェーから南仏までの冒険は「「ニルスのふしぎな旅」のようで、私もトマを母の目で応援。ほぼCGなしの撮影技術も出色。眼下に広がる草原や湖、大地の美しさに目を奪われました。鳥をリードして飛ぶトマがたくましく成長していきます。別居中の父母も、鳥と飛ぶトマをみつめ、家族のかけがえのなさに気が付いていくのです。

渡り鳥を通して、自然を守ることの大切さを、ダイナミックな映像で伝えて心が洗われました。

監督は動物と人との絆を描く作品で知られ「「ベル＆セバスチャン」も好きな映画です。

屋根は家族を表している

宇宙でいちばんあかるい屋根　藤井道人監督

14歳のつばめ(清原果耶)は、父親と血のつながらない母親との3人暮らし。両親に子どもができたことから生まれる疎外感とともに幼なじみの大学生、亨(伊藤健太郎)への恋心も抱いています。ある日、つばめは唯一の心休まる場所だった書道教室の屋上で派手な老婆がキックボードに乗って空を飛んでいる姿を見かけます。つばめは星ばあ(桃井かおり)と呼ぶことになったその老女に恋や家族の話をするようになります。

成長していくひと夏の体験をファンタスティックに描いた野中ともその同名小説を映画化したのは、「新聞記者」の藤井道人監督です。

「年くったら、何だってできるようになるんだよ」と笑う星ばあと過ごすなかで、つばめの表情は美しく輝き出していくのです。「ありがとう、星ばあ」と涙するつばめは、ちょっぴり大人になっていました。

屋根を見ればどんな人間が住んでいるかわかると星ばあ。屋根は家族を表しているようです。つばめは父から「ママはつばめが可愛くて一緒に過ごす時間をたくさんほしくて、子どもを生まなかったんだよ。妹が生まれたら、うんと面倒見てあげてね」と語る場面に涙があふれました。

私はつばめが星ばあと、水族館で水槽のクラゲを見るシーンが好きです。「クラゲたちって、水の中を泳いでるんじゃなくて、なんだか空を飛んでるみたい」とつばめが言うと、「空のクラゲみたいに、ゆうらり生きてんのさ」という星ばあ。私もそんな風に生きたいなぁと心に沁みました。

星好きの我が家ですので、星の物語というだけで必見ですが、清原果耶と、桃井かおりのかけあいが素晴らしく、最近みた邦画のベストワンでした。

パンフレットではなく原作を買い、こちらも一気に読みました。

生きる希望に向かって走り抜け

ソワレ

外山文治監督

芽が出ない俳優の翔太(村上虹郎)は詐欺まがいの仕事をしています。故郷の高齢者施設で彼の所属する劇団が芝居を教えることになりそこで出会ったのがタカラ(芋生悠)でした。

ある事件をきっかけに二人の逃避行が始まります。二人が駆ける和歌山の風景に魅せられました。観光地ではなく「御坊日高」地区であることをパンフレットで知りました。逃げる二人が身をひそめたのは、廃校や空き家、農家。二人の気持ちに寄り添うようでした。二人は恋人どうしではないのに、お互いが影響しあいます。タカラが全力疾走する姿に生きる力強さを感じました。お金に困って、二人は稼ごうとしますが、翔太はパチンコで儲けようとするし、タカラは、スナックでバイトして稼ぎます。この時のタカラの表情は輝いていました。

二人が仲違いしたとき、タカラが真夜中の和歌山県立近代美術館のエントランスの水を「日高川」に見立てて渡るシーンが印象的でした。

逃げるのをやめたラストに感動しました。しっかりと地に足をつけて働く翔太。タカラもきっと力強く生きていくに違いない。二人に希望が灯って余韻が残りました。

この映画を製作したのは、豊原功補さんと小泉今日子さん。コロナ禍で、資金繰りも大変な中で、心強い応援ですね。

33年目の銀河通信219号ありがとうございます。7ブックチャレンジにも「不思議なレストラン」を紹介してくださり嬉しかったです。毎号、私の中で飢えていた知的な学び、社会の不正義への真っ当な眼と、怒り、そして山登りや本や映画という感性の豊かさをバランスよく満たしてくれます。みな子さんのまっすぐな生きる姿勢、誠実さがよく伝わってきて、自分の気持ちがしゃっきりしてくるのです。一人の市民として、平和に生きられる社会を実現していくために、みな子さんの「銀河通信」はきちんと思いを伝えてくれています。2020・8・12(松浦幸子さんのお便り)

前橋市のエスペランチスト堀康雄さんの絵手紙

購読料と寄付をありがとうございます
(敬称略) 7月31日～9月4日

鈴木澄江　高橋儁(切手も含む)　新西孝司
喜多義憲　有田美江　岩井善昭　菅野真知子
三島春光　藤谷和廣　奥野謙介　大井恵子

計35,500円　は印刷と送料に使わせていただきます。山野井孝有さんから「戦争はいけません」上條敏昭さんから「世紀を超えて徳澤園135年史」の著書を寄贈していただきました。合わせてありがとうございます。

郵便振替「銀河通信」02740-7-56535 年間1,500円です。2021年からは年間2,000円に変更します。WEBに切り替える方はお知らせください。

219号でお名前の間違いがありました。大橋明さん→(正)大橋晃さん　申し訳ありません。